

# 超短編

1



story by aono



photo by hiro [http://homepage3.nifty.com/allion\\_hiro/](http://homepage3.nifty.com/allion_hiro/)

ひとりで日の出を見に来たのかって？

ひとりじゃ悪いか？

生まれてこのかた、自慢じゃないが日の出なんぞ見たことがない。

オヤジもオフクロも、そんな事には興味のない人間だった。

だからというわけじゃないが、日の出を見るために早起きをするなんざあ、まっぴらだったね。

昨日までは・・・だ。

そんなオレが、寒い中昨日の夜から徹夜で日の出を待ってるんだから、世の中わからねえもんだな。

理由？

そんなもんはねえよ・・・と言うのは真っ赤な嘘だ。

かかあはどっかいったし、息子や娘はとんと寄りつかねえ。

家族もいなきゃあ、金もない。

ないない尽くしときたもんだ。

そんなこんなで生活が嫌になっちゃって、お日様でも拝んでみようかと思ったのさ。

ところでお前さんもひとりのようだね？

荷物が多いようだが、何持ってるんだ？

若そうに見えるね・・・そうか二十歳か。

この世に見切りをつけるにゃあ、ちと早すぎる。生意気ってもんだ。

お前、なんだか落ち着かないねえ。

ここに来たわけは・・・言いたくねえか？

オレはお前の3倍近く生きて苦労してるんだぜ。

お前だってそのくらい苦労しなけりゃ、世の中不公平ってもんだ。

お、日が昇ってきた。

雲の合間であんなに輝いている。

.....

.....

綺麗だなあ。

おいおい、さっきから何をゴソゴソやってるんだ？

カメラ？

お前、写真を撮りに来たのか？

そうならそうと最初から言えよ。

心配しちまったじゃないか。

ま、いいか。出来上がったから見せろよ。

大きく引き伸ばしてこの住所へ送ってくれ。

そのくらいいいじゃないか、心配してやったんだから。

壁にかけて、落ち込んだときに見ることにするよ。

じゃあな、忘れるなよ。

オレはそろそろ帰って寝るとするか。



photo by hiro [http://homepage3.nifty.com/allion\\_hiro/](http://homepage3.nifty.com/allion_hiro/)

私があの人と出会ったのは、もう十年も前になるだろうか。  
沼のほとりで静かに佇んでいるあの人は、長い足を軽く交差させ、白い首を微かに傾げていた。  
まるで白鷺のようだ、と私はしばらく見とれていた。  
視線を感じたのか、あの人は振り返って私を見た。  
怯えたようなその瞳は、私を困惑させた。  
驚かすつもりはなかったのに……。  
白いスカートを翻し、湿原を越えて森の中に消えたあの人を、私はじっと見送った。  
次の日も、そのまた次の日も、あの人に出会うために私は沼へ通った。  
あの人はいつも同じ場所に立っていた。  
私は気づかれないように、木の陰に隠れてそっと見守った。  
そんな日がどのくらい続いただろうか。  
私はとうとう耐え切れなくなって、声をかけた。  
「こんにちは」と……。  
気の利いた言葉は思いつかなかった。  
「毎日何を見ているの？」  
あの人は、以前と同じような怯えた目をして私を見ると、湿原に向かって走り出した。  
私は後を追った。

白い服が、背の高い草の間に見え隠れする。

見失ってはいけない。 私は必死で追いかけた。

もう少しで追いつける、と思った瞬間、あの人の姿が急に消えた。

私は立ち止まって、あたりを見回した。

あの人が消えたあたりに白い花が一輪咲いている。

その花の形は白鷺に似て、空に向かって羽ばたいているように思えた。

あの人は白鷺の化身だったのだろうか。

人間の私に捕まらないために、姿を花に変えたのだろうか。

夏になると、あの花に会うために私はその沼を訪れる。

毎年増え続けた花は、今、湿原一帯を埋め尽くしている。

その花の名を鷺草と言う。



photo by hiros <http://n43e141.exblog.jp/>

君はノームを知っているだろうか。

そう、老人の顔をした小さな人、地の精霊とも言われている。

春の日差しが暖かく感じられるようになったある日、僕は偶然に彼らの世界への入り口を見つけってしまった。

正確には入り口への階段と言った方がいいだろうか。

湿原に咲く水芭蕉を見に行ったときのことだった。

僕はまだ芽吹いていない木の幹に背をあずけ、ぼんやりと湿原を眺めていた。

目の端を何かが横切ったような気がして、首をそちらにまわした。

リス？

リスではなかった。

僕は驚きのあまり叫びそうになるのをぐっと抑えた。

目に入ったのは、リスより小さな、ひげをはやした人間だった。彼は左右を警戒するように見回したが、僕の姿は目に入らなかったようだ。覺られてはいけないと、僕は息を殺してじっとしていた。

彼は、木の幹に螺旋階段のように生えているキノコを、上手にのぼっていく。

僕は彼の後を目で追った。

キノコの階段を上へ上へと進み、その姿はだんだん小さくなる。

やがて階段がなくなった辺りで、ふっと消えた。

僕は思わずその木へ駆け寄った。

自分も登って確かめたい気持ちが、僕の体を駆け巡る。

確かめて何になる？

探し出してどうするんだ？

彼らの平和を乱すだけじゃないか？

僕は好奇心を抑え、木に背を向け、湿原を後にした。



photo by hiros <http://n43e141.exblog.jp/>

私はポピーを愛する彼女のために、花畑へと出かけた。  
晴れ渡った空の下、色とりどりのポピーが輝いていた。  
膝をつき、持参した鋏でつぎつぎとポピーを刈り取る。  
このくらいあれば、彼女は喜んでくれるだろうか。  
腕いっぱいポピーを抱え、立ち上がる。  
先ほどの青空は消え、花畑は白い霧で覆われている。  
私は軽いめまいを覚えた。  
視界に入るのは、相変わらず輝いているポピーの花だけ。  
歩いてきた道も、遠くに見えた山も消えている。  
私はポピーの花畑の真ん中に取り残された。  
やがて睡魔が私の意識を吹き飛ばした。  
目覚めれば、一面の枯れ野原。  
刈り取ったはずのポピーの花束は跡形もない。  
重い足をひきずり、私は彼女の家へと向かった。  
彼女はソファの背にもたれ、深い眠りに落ちていた。  
足元には萎れたポピーの花が散乱している。  
花の精の仕業だろうか。  
いや、眠りの神、ヒュプノスの仕業だろうか。  
私は知らず知らずのうちに、ヒュプノスの花園を荒らしてしまったのかもしれない。



photo by hiros <http://n43e141.exblog.jp/>

10年ぶりに、サンカヨウに会いに出かけた。

初めてこの花に出会ったのは、五月の連休の頃、私がとても落ち込んでいるときだった。  
沈んだ気持ちで山道を一人歩く。

心は灰色の雲で覆われていても、見上げた空は晴れ渡っていた。

私の気持ちなんて誰も分かってくれない。

青い空にさえ当り散らして、目的も無く、ただ歩いていた。

そんな時に会ったのがサンカヨウの花だった。

緑色の大きな葉の端に遠慮深げに咲いている白く小さな花。

厳しい環境の中で、不平も言わず、運命を呪わず、ただひたすら白い花を咲かせている。  
だからこそ清廉で美しいのだろう。

私は花に教えられた。

こんなに元気になって、自分の道を進めるのもあなたのお陰と報告したくて、この道を歩いている。

もうすぐ会える。私のところは弾んでいる。

あの道を曲がれば確かサンカヨウがあったはず。

なくなっていないよね？ と自分に言い聞かせながら前方に目を凝らす。

あった！

前と同じところに、以前よりずっと大きな群落となって、サンカヨウは咲いていた。



photo by mimusan <http://mimusan.my-photo.jp/>

セキレイの学校に転校生が来ました。

「ほら、あそこにいるのが今度入った子よ」

レイコは隣のセキオに囁きました。

「生意気そうじゃない？」

「う～～ん。そうかなあ。そうだなあ」

セキオは煮え切らない返事をします。

「そうよ、あの歩き方！ 転校生の態度じゃないわ」

「そうかなあ。そうだなあ」



photo by mimusan <http://mimusan.my-photo.jp/>

二人の話を小耳に挟んだ転校生が胸を膨らませて近づいてきます。

「あんたたち、何話してんのよ」

「いや、あの、その……」

セキオはしどろもどろです。

「あんたの知ったことじゃないわ」

レイコは胸を反らして答えました。

「ふん、どうせあたしの悪口でしょ。もんくがあるならかかってきなさいよ」

「いや、あの、その……」

セキオは逃げ腰です。

口を尖らして迫ってくる転校生に圧倒されて、セキオは逃げ出しました。



photo by mimusan <http://mimusan.my-photo.jp/>

「なんでにげるのよ。弱虫！」

レイコはピーピーと文句を言いました。

「そんなこと言われてもなあ」

セキオは困り顔です。

「あいつに勝てないわけ？」

レイコの口はピーピーピーピーと連射攻撃です。

「いや、あの、その……」

セキオは心の中で思いました。

『これだから女はいやなんだ。自分では何もしくせに……』

でも、決して声に出しては言えないセキオでした。